

2022年4月3日大齋節第5主日

イザヤ書 43章 16-21節

フィリピの信徒への手紙 3章 8-14節節

ルカによる福音書 20章 9-19節

4月に入りました。教会庭の桜は、満開です。教えている神学校では、一昨日1日に入学・始業礼拝があり、明日から早速新学期の授業開始です。それぞれ新しい年度が始まります。わたしの東京聖三一教会での勤めも、皆さまのお祈りに支えられて、二年目を迎えました。気持ちを新たに歩みたいと思います。

さて、本日の旧約日課は、「イザヤ書」ですが、「見よ、新しいことをわたしは行く。今や、それは芽生えている。」(イザヤ43:19)とある通り、主なる神様が、新しいことが内容となっています。その意味では、本日にふさわしい箇所といえるかもしれません。

「イザヤ書」は、66章まである長い預言書ですが、三つの部分に分かれるといわれています。それぞれ、第一イザヤ(1~39章)、第二イザヤ(40~55章)、第三イザヤ(56~66章)と称していますが、本日の箇所は、第二イザヤに属します。この第二イザヤはバビロン捕囚(紀元前597年から538年)の終了前後の著作と考えられます。

このバビロン捕囚という出来事は、『聖書』に記された数多くの歴史的出来事の中でも、重要な事柄の一つです。それはイスラエルの新しい出発であり、第2の出エジプトとも考えられるからです。つまり、イスラエルの人々は、「主が神であり、唯一の救いである」ことを証言する証人として、再び集められるということです。

本日の聖書日課は、その主なる神様がイスラエルの新しい出発について、過去を振り返りつつ、また譬えを用いて語っている箇所です。この箇所が含まれている43章の最初から見ますと、そこには、「ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う」(イザヤ43:1)とあります。「新共同訳」では「贖う」と現在形のように訳してありますが、「贖った」と完了形に訳す方が原文に近く、新しい「聖書協会共同訳」では「贖った」となっています。ここにあるヤコブとはイスラエルのことです。また、「主」という言葉は、主なる神様の名前の読み替えです。ここでは主なる神様が、ヤコブ・イスラエルの創造者であり、その方がバビロン捕囚で滅びを経験したご自分の民、イスラエルを贖ったと宣言されているのです。イスラエルは、主なる神様に対

して過ちを犯したのですが、「わたしの名によって呼ばれる者。わたしの栄光のために創造し形づくり、完成した者」であるからです（イザヤ43：7）。

バビロン捕囚の終了という、このイスラエルにとって節目の出来事に、主なる神様は、ご自分の栄光のために想像されたイスラエルに、「恐れるな、私は贖った」と宣言されたのですが、この「贖う」という言葉の意味は、罪を償うこと、何らかの代償にして手に入れることです。その意味自体は、『聖書』の中でも同じですが、『聖書』の中では、政治的・社会的・宗教的に用いられます。政治的にはイスラエルの民族の解放的意味し、社会的にはイスラエルの制度の再建、宗教的には罪からの救いを意味します。これらを総合しますと、「贖う」とは、単に罪を取り消すだけではなく、新しい事柄が始まるということの意味します。それゆえにイザヤは「主はこう言われる。海の中に道を通し恐るべき水の中に通路を開かれた方、戦車や馬、強大な軍隊を共に引き出し、彼らを倒して再び立つことを許さず、灯心のように消え去らせた方。」（イザヤ43：16-17）と出エジプトの出来事を短く想起しながらも、「初めからのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。」（イザヤ43：18）と告げるのです。この個所の「新共同訳」は、「初めからのこと」と訳されており、天地創造のことを思い出すなというように思えてしまうのですが、そうではありません。新しい訳「聖書協会共同訳」は「先にあったことを思い起こすな。昔のことを考えるな」となっており、先の短く触れた、出エジプトでの出来事のことを指していることがわかります。出エジプト、それはイスラエルにとって大切な事柄であり、今もイスラエルの出発点とも言える出来事なのです。先ほど自分でも、バビロン捕囚は、第2に出エジプトと表現しましたが、「イザヤ書」は、その歴史的出来事自体を出発点とするなど語っているのです。

それはどのようなことを意味するのでしょうか。出エジプトとは、モーセによって始められた祭司と王、そして預言者の時代へと続く出発点です。イスラエルという民族的集団形成の出発点といえます。しかし、ここで「イザヤ書」は、民族の枠組みを超えた、メシアの支配の時代が始まったことを伝えているのです。実際、バビロン捕囚を終了させたメシアは、イスラエルの人々の中から選ばれた人物ではなく、異国ペルシアの王キュロスでした。それゆえ、そのキュロスによってもたらされた、バビロン捕囚の終了が意味することとは、歴史的背景持つ民族的集団としてのイスラエルの復興・再興ではありません。イスラエルに属する一人ひとりが、ひとり人間として、主なる神様とどう向き合い、どう生きるかが問われる時代となったということです。それが、主なる神様の「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。」（イザヤ43：19）が意味すると

ころです。

ただし、主なる神様ご自身が変わったわけではありません。「わたしは荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる。野の獣、山犬や駝鳥もわたしをあがめる。荒れ野に水を、砂漠に大河を流れさせ、わたしの選んだ民に水を飲ませるからだ」

(イザヤ43：19-20) と、主なる神様がすべての創造者であり、その力が自然界にも及ぶことに変わりはありません。同時に、「わたしが選んだ民」とある通り、「(主の) 民」であることが重要なのではなく、「主が選ばれた」ということが大切となるのです。つまり、イスラエルは、無条件でイスラエルであり続けることはないのです。

バビロン捕囚の終了という、イスラエルに深く関わる出来事を通して始まった、新しい事柄とは、人間一人ひとりが主なる神様から問われる時代の始まりです。逆に言えば、イスラエルという枠組みを超えて、すべての人間が、主なる神様から、何かを考える時代、全世界的に何かを考える時代になったと、「イザヤ書」はここで告げているのです。

ただし、その後のイスラエルの歴史は、第二イザヤの後も、神殿再建、王国再建、そして二回目の王国滅亡・神殿崩壊という出来事を迎えます。しかし、「イザヤ書」は、新しい時代の始まりを告げていました。21世紀になって、人類は、様々な枠組みや事柄を全世界的に考えることの大切さに気付き始めていますが、そのように考える遥か前、今から二五〇〇年前に、「イザヤ書」は、主なる神様を通して、そのことを示していたのです。

さて、そのような新しい時代に、何を基にして、どのように生きるべきか、『聖書(旧約)』がもたらす第一の答えは「律法」です。今もそうであるといえます。しかし、『聖書(旧・続・新)』を通してみ言葉を学ぶわたしたちにとっては、どのように生きるべきかの、模範となってくださった方がおられます。そして、わたしたちの模範であると同時に、この地上でどのようなことがあっても、最終的に勝利・救いに至ることを示して下さった方がおられます。主イエス・キリストです。そして、主イエス・キリストがそのような方であることの根拠となる事柄が、復活です。それゆえに、復活のイエス様に出会ったパウロは、イスラエルの歴史と律法に精通していたにもかかわらず、本日の使徒書で「そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたに見なしています」(フィリピ3：8) と述べるのです。イスラエルという枠組みの中で、誠実に歩み、誠実に律法を守り、歩むこと、それは悪いことではないのですが、それらを遥かに超えて、全ての人の救いの道が、主イエス・キリストによって示されたからです。

イエス様は、本日の福音書で、ひとつのたとえ話を語っています。「ぶどう園の農夫」のたとえです。物語の場面としては、イエス様がエルサレムに入り、敵対者との議論の中で語ったたとえ話です。その意味では、敵対者を批判するために語ったとも言えます。しかし、この譬えは、触れる人に時代を超えていろいろな問いを起こさせます。その中の一つには、必ず、ここに描かれているようぶどう園の主人は実際にいるだろうか、という問いがあると思います。譬え話ですから、実際に存在するか否かは関係ないのですが、おそらく、そのような主人は存在しないでしょう。しかし、そうであるがゆえに、それは主なる神様の様な方であろうと考えられると思います。逆に言えば、この譬えは、主なる神様はそのように慈悲深い方である、誤った方向に進む人が立ち返ることを待ち続ける方である、そう告げているともいえるのです。

教会の暦では、まだ大齋節の中ですが、新しい年度を迎えたわたしたちが、本日の三つの聖書から学ぶことはただ一点、今を生きているわたしたちにとっても、「主」こそ「神」であり、他に救いはないということです。そして、わたしたち人間が、いかに主なる神様に以外の事柄に捕われやすい存在であるかを認識することです。そのような事柄には、金銭、地位、名誉などの一般的な欲望に関する事柄のみならず、平和、解放、正義、連帯、共生など美しい言葉や概念も含まれます。そうであるがゆえに、人間に与えられた自由とは、何を考えて良い、できることは何でも実行してよいということではなく、主なる神様にのみに従うこと、そこから何かを学び実行するかが、大切なのです。

今も、世界中で紛争があります。しかし、2月に始まった戦いは、いろいろな意味で、新しい戦いの始まりかもしれません。一つの国内の紛争ではなく他国に対する戦いであり、そのような戦いを防ぐための国際的な組織が力を失い、決して用いてはならない大量破壊兵器の使用が具体的に考慮され、テクノロジーを用いた新しい戦い方法が実施された戦いであるからです。未来は予測できませんが、新しい戦いの時代が始まったのかもしれません。現代は科学も文化も神的存在になる時代であります。そうであるがゆえに、本当の神様が見えない、祈っても答えがないと絶望し、またある時は空しさを感じ絶望してしまう時代であるかもしれません。しかし、『聖書』、本日のイザヤ書は、すべての人の救いにつながる、新しい歩みの始まりの大前提として、「わたしは主である」（イザヤ43：3、15）と告げます。わたしたちは、『聖書』におけるイスラエルの民と同じように、現代の主なる神様の証人です。「わたしは主である」という『聖書』の言葉を、私たちの心の中に響かせたいと思います。そして、わたしたちの教会を通して、社会に響かせたいと思います。